

外国出張報告



感染症研究部 病原ウイルス研究室長 今井 邦俊
海外病研究部 診断研究室長 坂本 研一
プリオン病研究センター 病原・感染研究チーム長 横山 隆

目的・用務：第71回 OIE 総会出席
出張期間：平成15年5月18日～25日（今井・坂本）
平成15年5月17日～24日（横山）
出張場所：フランス（パリ）

[用務の内容]

国際獣疫事務局（OIE）は、1924年に設立され、国際的に重要な動物や魚類の伝染病に対して種々の取り決めや活動（診断・予防マニュアルやサイエンスレビューなど印刷物の発行、口蹄疫やその他重要疾病に関わる防圧委員会など国際会議や科学技術会議の主催）を行っている機関である。WTO-SPS協定締結後は、国際間での防疫に際して科学的正当性に基づく根拠が一層強調されるなか、この国際機関での取り決めが重要性を増している。近年、OIEは食品の安全性や動物の福祉を科学的・規範的に最優先項目としてその活動を拡大している。現在の加盟国は162カ国である。総会開会式には北村農林水産副大臣も出席され、基調演説が行われ、我が国の家畜衛生の現状について報告された。2日目に口蹄疫その他疾病委員会が主催した特別講演「The use of vaccination as an option for the control of avian influenza」でイタリアのDr. Capuaから科学技術的講演があったほか、現在ヨーロッパや中国で問題となっているトリインフルエンザのコード（衛生規則）の全面改定などがあり、今井邦俊室長はこの技術的対応のために出席した。牛海綿状脳症（BSE）については、疑似患畜の範囲に関するコード改訂とスタンダード委員会で動物衛生研究所のBSEリファレンスラボラトリーとしての認定のために横山隆チーム長が出席した。海外病研究部から坂本研一室長がFMDの一部コード改正に関する技術的なサポートならびに、口蹄疫その他疾病委員会への立候補のために出席した。トリインフルエンザの全面

コード見直しには、各国から様々な意見・要望が述べられた。今後、更に良いものにするため検討を要することが局長から示されて、原案通り採択された。動物衛生研究所は、総会において、英国、スイスに続く3番目のBSEリファレンスラボラトリーに指定された。海外病研究部の診断研究室長が動物疾病科学委員会（Scientific Commission for Animal Diseases -旧称「口蹄疫その他疾病委員会」-）の副会長に満場一致で選出された。

[所感]

Dr. Capua（イタリア）のトリインフルエンザに関する科学技術講演「The use of vaccination as an option for the control of avian influenza」は大変興味深いものであった。博士の提唱するワクチン（感染鶏とワクチン接種鶏の識別可能）の使用は、トリにおける発症防止を目的とするばかりではなく、トリからのウイルスの排泄量を軽減させることで本疾病の地域拡散を防ぐことに加え、ヒトへの感染防止も目的で有ることがわかりやすく解説された。

口蹄疫のワクチン抗体と自然感染抗体の識別では非構造タンパク質（NSP）を用いた診断について口蹄疫科学委員会議長Dr. Thomsonから個体への応用は現段階では困難で群単位での使用が考えられることが示された。これに対してまだ技術的に確立されていないなどの意見やワクチン接種を大規模に行っている南米などからは、地域やゾーン単位での清浄化のため、いち早い導入が要望された。

（坂本 研一）